

報告第2号

類似町村の産業・観光振興に関する事務の調査について

令和5年6月21日、本委員会に付託された標記の調査の結果について、小坂町議会議規則第71条の規定により、次のとおり報告書を提出します。

令和6年2月29日

小坂町議会議長 目 時 重 雄 殿

産業教育常任委員長 亀 田 利 美

## 産業教育常任委員会事務調査報告

### 1. 調査事項

- (1) 観光振興について
- (2) カーボンニュートラルについて

### 2. 調査場所

- (1) 岡山県津山市 (①津山市役所 ②津山まなびの鉄道館)
- (2) 岡山県岡山市 (有限会社国定農産)

### 3. 調査の目的とするところ

類似町村の産業・観光振興に関する調査を実施して、当町議会活動の一助とする。

### 4. 調査期間

令和5年11月13日(月)～11月15日(水)

### 5. 調査委員

(委員長) 亀田 利美 (副委員長) 熊谷 聴  
(委員) 船水 隆一、栗山 忠三、本田 佳子、成田 直人

### 6. 調査の内容

#### 〈岡山県津山市〉

##### (1) 津山市の概要

###### ①地勢・沿革

津山市は、中国地方の東部、岡山県の北部に位置する市。岡山県では第三規模の都市である。1929年(昭和4年)市制施行。

かつては県北の雄都と呼ばれていた。県北の美作地方および津山都市圏の中心都市であり、同時に人口面と経済面における県北最大の都市。また、中国山地の中心都市でもある。越前松平家10万石津山藩の城下町から発達した都市で、市街地は旧苫田郡に含まれる。市全体では、苫田郡・久米郡・勝田郡の3郡に跨る。津山は古代律令時代より美作国の中心地で、山地の多い美作において平野面積が大きな津山盆地に位置することから、古くよりもっとも開け、出雲街道の宿駅なども置かれていた。一宮の門前には市が立ち戸川宿が成立する。戦国時代後半には、森蘭丸の弟の森忠政が18万6500石を拝領し戸川に入封。中世に山名氏が築城した鶴山城跡地に築城し、新たに城下町を築いた。同時に、鶴山を津山へと改称。森家断絶後は、越前松平家が10万石で入封する。江戸時代には津山城の城下町となり、当時の遺構や古い町並みも残っている。

## ②人口・産業別就労人口割合

・人口

96,673人（令和5年6月1日現在）

・産業別人口割合

第一次 6.0% 第二次 26.8% 第三次 62.8% 分類不能 4.4%  
（令和2年国勢調査）

## ③産業

国勢調査による直近の産業別就業者数は、市民の多くが第三次産業に従事している。県北の拠点として、商業は中心産業である。古くから美作国津山藩の城下町として、また出雲街道の宿場町として、街道沿いには商家が建ち並び、商業は盛んであった。旧出雲街道沿いに広がる市街地には多くの商店街が形成されていたが、モータリーゼーションの発達に伴う近年の郊外型ショッピングセンターの隆盛により利用は減少傾向にある。

## （2）調査テーマ

歴史的建造物及び近代化遺産を活用した観光振興について

①文化財の保存、活用による観光振興

②津山鉄道遺産等の活用による観光振興

## （3）調査事項

①文化財の保存、活用による観光振興

津山市では、まち全体を「屋根のない博物館」と捉え、市内に点在する歴史、文化、自然、伝統、芸術など、津山市が持つ魅力をつなぎ合わせ、新たな魅力を創造する活動を進めることで、地域のポテンシャルを高めるとともに、住民自らが主体となり未来をデザインするまちづくりを目指す「津山まちじゅう博物館構想」を策定した。

構想の概要

◆基本理念

津山を未来に引き継ぐための「津山らしさ」の創造と地域活力の向上

◆基本方針

1. 津山遺産の再認識と保存・活用・創造（意識づくり）
2. まちじゅう博物館活動を担う人材の育成（人づくり）
3. まちじゅう博物館のインフラ等の整備（土台づくり）
4. 津山遺産を活かした地域経済循環の拡大（施策づくり）

◆目指す博物館の姿

1. 古代から近世、近代のそれぞれの時代にどっぷりとつかることができるまち
2. 人それぞれの嗜好に対応した楽しみ方が提供できるまち
3. 来るたびに来訪者に様々な発見と交流があり、そこに感動が生まれ再度訪問したくなるまち

4. 津山人の気質あふれる時代に挑戦する機運の感じられるまち
5. 地域住民と行政が一体となり、津山らしさを未来につなぐための様々な活動を行っているまち

#### ②津山鉄道遺産等の活用による観光振興

1936年津山駅に造られた旧津山扇形機関車庫は延床面積2,527㎡、総工費は当時の金額で11万600円。機関車収容線数17は、梅小路機関車庫に次ぐ現存二番目の規模。躯体は鉄筋コンクリート・フラットスラブ構造で、向かって右の低棟には道具置場、技工長室、修繕室、鍛冶場が置かれ、高棟は第1から第4、中棟には第5から第17の機関車収容線が敷かれていた。屋根高は低棟6,700mm、高棟8,450mm、中棟7,303mmで、第5線と第6線、第11線と第12線の間にはエキスパンションジョイントがある。ジョイント部分で中棟は高棟に、高棟は低棟に乗りかかるように設計されている。エキスパンの役割は温度によるコンクリートの伸縮や地震による揺れの違いを吸収し、巨大コンクリート建造物を崩壊から防ぐことにあると考えられている。

背面が広いガラス窓で覆っているのは、黒い蒸気機関車と煤煙によって暗くになりがちな庫内に自然光を取り入れるためのもので、それが扇形機関車庫の特徴である。

津山の地に遺された、価値ある鉄道遺産を後世にしっかりと伝えていくことにあわせて、今や私たちの暮らしに深くかかわっている鉄道の成り立ち、社会や地域とともに発展してきたあゆみ、しくみの変遷について紹介し、特に、これから将来を担っていく小・中学生など若い世代に、鉄道に対し一層理解を深めてもらうことをねらいとしている。

#### (4) 所 感

まちづくりの観点において、行政依存型から民間主導へ、税金ではなく民間資金へ、奉仕ではなく投資へという考え方であった。上（都会）を見ず、足下（津山）を見る、都会を追わず津山独自のまちづくり、これまでの常識にとらわれない発想、これらをコンセプトに住民一人一人がパブリックマインド（公共的意識）をもち、中長期的に訪れるであろう困難な時代に耐えられる持続可能な地域社会を形成するための指針として博物館構想が位置づけされている。

当町としても、観光産業の理解もそうだが、町政全般にわたって住民一人一人がパブリックコメントの発信しやすいまちになることや、住民自らが活躍しやすいまちになることなど、住民が主役になるまちづくりをコンセプトに行政運営が図られることが必要と感じた。

## 〈岡山市〉

### (1) 市の概要

#### ①地勢・沿革

岡山市は、岡山県の南東部に位置する都市。岡山県の県庁所在地および東瀬戸経済圏最多の人口を有する都市であり、政令指定都市に指定されている。当市を中心とした岡山都市圏は中四国地方最大の都市雇用圏を持つ。

中四国のクロスポイントとして、1980年代以降、瀬戸大橋の開通やJR線の四国との直通化、山陽自動車道の開通など、交通インフラが急速に整備され、岡山都市圏は周辺都市圏と共に東瀬戸経済圏最大の都市として成長してきた。岡山駅は、山陽新幹線や山陰・四国方面への特急列車が乗り入れる中国四国地方最大級のターミナル駅である。岡山都市圏の人口は、当市が人口47万人の倉敷市と隣接することから、人口118万人を擁する広島市を中心とした広島都市圏を上回る規模を誇る。

戦後一貫して人口増加しており、2005年以降、周辺4町と合併したこともあり、人口は70万人を突破した。2009年4月1日には政令指定都市に移行し、北・中・東・南の4行政区が設置された。

市の北部はなだらかな丘が続く吉備高原の一角をなしており、市民の水がめである旭川ダムや岡山空港、および近郊住宅街がある。瀬戸内海に注ぐ旭川と吉井川、2つの一級河川の運搬・堆積作用によって形成された南部の岡山平野に中心市街地が位置しており、さらに平野の南部は江戸時代以降の干拓地であり農地が広がり、穀倉地帯をなしている。その南に児島湾を挟み、瀬戸内海を望む風光明媚な児島半島の丘陵地を成す。

北を中国山地、南を四国山地に挟まれた瀬戸内海沿岸部に位置するため、典型的な瀬戸内海式気候に分類される。

#### ②人口・産業別就労人口割合

##### ・人口

699,112人（令和5年9月末現在）

##### ・産業別人口割合

第一次 1.6%      第二次 23.3%      第三次 75.1%

（令和2年国勢調査）

#### ③産業

国勢調査による直近の産業別就業者数は、市民の多くが第三次産業に従事しており、製造業、サービス業の総生産が多く、隣接する倉敷市とともに瀬戸内工業地域に属しており、製造品出荷額は8,200億円と岡山県全体の約10%を占める。機械・化学・食品・印刷などの業種が中心である。

## 〈 有限会社国定農産 〉

### (2) 会社の概要

創業： 1931年2月、資本金：1,998万円、主要農産物：水稻、ハトムギ等  
経営耕地175haは、岡山市南部の児島湾干拓地に位置する。

古来より瀬戸内海に面したこの浅い海は、河川による土砂の体積による干拓が発達していた。

明治32年からは、当町とも縁のある藤田組（藤田伝三郎氏）が大規模な干拓工事を着手した。難工事の末、大正2年に藤田組としての事業を完了した。現国定農産会長の祖父が藤田組の従業員として働いていたことから、その報償の一部として水田を譲り受けたことをきっかけに、世代を繋ぎながら現在の大規模農業法人に至る。

### (3) 調査テーマ

バイオ炭及びJクレジットの活用に関する取り組みについて

### (4) 調査事項

地球温暖化防止策として、二酸化炭素の削減は、国をはじめ自治体や個人に至るまで共通の課題となっている。このような中で、二酸化炭素排出量の削減や適切な森林管理による二酸化炭素の吸収量を「クレジット」として国が認証する制度（J-クレジット）が令和4年8月10日から施行された。

有限会社国定農産では、もみ殻を炭化させた「バイオ炭」の製造に乗り出した。土壌改良材として販売するほか、炭素を地中に貯留し、二酸化炭素の排出枠（クレジット）として取引するビジネスにも参入。将来的には、もみ殻に豊富に含まれるシリカを工業原料として販売する構想も描いており、もみ殻関連事業を収益の柱の一つに育てる。

令和5年に自社用地に炭化炉などを備えた生産拠点を新設し、バイオ炭の量産体制を整えた。バイオ炭は多孔質構造のため、土壌の透水性や通気性などを高める効果があるとされ、同様に土壌改良効果が期待される米ぬかと混ぜ、ペレット状の土壌改良材に加工する。自社の農業生産に役立てるとともに、近隣農家にも販売する。バイオ炭は土中で微生物に分解されにくい。分解に伴う二酸化炭素の発生も抑えられるため、温暖化対策として注目されており、バイオ炭の農地施用は2020年、排出枠を取引する国の「J-クレジット」制度の認証対象となった。同社は農地にまくことで排出枠を創出し、売却するビジネスを事業化した。

生産拠点にはシリカ製造生成機も導入。もみ殻由来のバイオ炭を原料に、化学反応を繰り返して高純度のシリカを取り出す。シリカは、二酸化ケイ素によって構成される物質の総称。撥水性や耐熱性に優れ、塗料やコンクリート、タイヤといった工業製品への利用を想定している。今後、岡山リサーチパーク内のベンチャー企業であるジェネスラボの技術協力を得てシリカを生成し、工業分野での販路開拓を目指す。

一連の投資額は約6千万円で、新分野に進出する中小企業などを支援する国の「事

業再構築補助金」を活用した。同社は中四国地方屈指の農業法人。もみ殻の排出量は年間数十トンに上るといい、これまでは畑の水はけをよくするための資材や保温剤などとして、農家や企業に無償で供給していた。農林水産省によると、平成21年度の日本の温室効果ガス排出量は、二酸化炭素換算で11億7千万トンで、全体の4%を占める。国定豪会長は「海外では炭素の農地貯留はカーボンファーミングと呼ばれ、二酸化炭素を減らす手法として注目されている。農産物の生産販売という従来の農業経営から一歩踏み込み、農地の炭素貯留をクレジット化できれば、大きな商機になる」と期待している。

#### (5) 所 感

2050年のカーボンニュートラルに向け、もみ殻製造プロジェクトは、前倒しで国の補助事業メニューに搭載されており、J-クレジットの観点からも、電力会社、地銀、商社など、プロバイダーによる水面下での陣取り合戦が行われていることが理解できた。

今般の視察研修で最も感じたことは、新たな農業開発に向け精力的に取り組む姿勢が国内外に大きな反響を与えたことは特筆すべきことであり、当町にとってカーボンニュートラルを履行するためにも、同等のプラントを創出させ、できるだけ早期に国の補助事業にのった新たな法人の設置を行うべきことと感じた。また、常に新たな農業の挑戦を考え進もうとする貪欲な姿勢は当町にとって見習うべき点が多いと感じた。